

楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯靈『海誓』をめぐって

——恋愛と復讐の変奏——

杉村安幾子

序

ある小説が原作となって翻案作品が生まれるということは、洋の東西を問わず珍しくない。例えば日本を例にとっても、紫式部の『源氏物語』は後世に幾つもの翻案・擬作小説を生んだのみならず、歌舞伎・浄瑠璃・能の素材となり、更には映画・演劇・ミュージカル・漫画・アニメにまでなっている。こうした翻案作品が生まれるのは、原作に翻案作品を生みたいと思わせる魅力があり、翻案者を突き動かすからに他ならないだろう。

さて、五四時期に活躍した京派文人に作家楊振声（一八九〇—一九五六）がいる。楊振声の短編小説「抛錨」（一九三七）は、石華父（一九〇五—一九六九）によって戯曲「抛錨」（一九四六）となり三幕劇『海葬』として上演され、柯靈（一九〇九—二〇〇〇）によって映画の脚本『海誓』（一九四八）となり翌年映画化された。この三作品は、主要登場人物と物語の基本線こそ軌を一にしているが、戯曲化・脚本化の過程において新たに付加された要素も少なくない。本稿では原作にどのような要素が新たに加えられたのかを分析し、その意味する所を考察していきたい。この作業は即ち、小説が戯曲となり舞台に上げられ、映画となって銀幕で上映されるという変

身・変容を遂げる、そのメタモルフォーゼの含意をも追うことになるだろう。但し、話劇『海葬』および映画『海誓』を直接観る機会は得られていないため、あくまでテキストとして比較検証する。

1. 原型…楊振声「抛錨」——漁民同士の私刑

楊振声については日本ではほとんど紹介がなされておらず、専論は楊振声の代表作『玉君』（一九二五）を通して五四時期の知識人のありようを論じた宮尾正樹氏の一篇しかないと言って良い。⁽¹⁾ 中国本国でも専論は多いとは言えず、あるとしても『玉君』についてか、国立青島大学学長を務めた他、北京大学・中山大学・清華大学等の教授を歴任した楊振声の教育者としての功績を論じたものが中心である。

楊振声の略歴については宮尾氏の先行研究に譲るが、ここでは楊振声が山東省蓬萊県水城鎮（現煙台市蓬萊市）の出身であることを確認しておきたい。宮尾氏も指摘しているように、蓬萊県水城鎮は山東半島の最北の渤海に面した漁村であり、この故郷のイメージは『玉君』ほか、「漁家」（一九一九）、「搶親」（一九三二）、「報復」（一九三四）、「荒島上的故事」（一九四三）などの作品に反映されている。これらの作品の多くは、貧しい漁民や彼らの生活に材を取ったものであり、魯迅に「楊振声は極力人民の生活の痛苦を描こうと努めている」と評される所⁽²⁾ となっている。その点については、「抛錨」も例外ではない。

「抛錨」は一九三七年五月の『文学雑誌』月刊創刊号に掲載された。『文学雑誌』は北平に編集部がおかれ、上海商務印書館から出版されていた。主編は朱光潜、執筆者には京派文人が多く、創刊号には他に胡適・戴望舒・卞之琳が詩を、沈從文・老舍が小説を、李健吾・林徽因が戯曲を、周作人・錢鍾書・楊絳・廢名が散文を発表している。以下にごく簡単に「抛錨」の粗筋を紹介しておこう。

海辺の町。借金だらけの漁師穆三は荒っぽい性格で、他の漁師達との関係は良くないが、未亡人何二姑や少年漁師小乙には親切で面倒を見るなど、心優しい面も持っている。ある日、穆三は小乙が漁師達のリーダー劉四に、漁に不可欠な漁網を騙し取られたと知り、こっそり劉四の網を舟から切り離し、他の島で売り飛ばし、小乙に代わって仕返しをする。劉四は穆三が犯人であることを突き止め、仲間の漁師達と穆三殺害計画を練る。穆三が何二姑の家にいる時、劉四らが襲撃をかけるが、何二姑は穆三を庇い、彼はここにはいないと言う。劉四らが身代わりに何二姑を連れて行こうとするのを見て、隠れていた穆三は姿を現し、悪いのは自分であると告げ、おとなしく劉四らに海に沈められる。

六五〇〇字足らずの短編「抛錨」は、漁師の男達が面子を争い、最終的に一人が海に沈められ、命を落とすという物語である。趣向を凝らした展開や複雑な人間関係などは描かれず、その意味では五四作家の楊振声らしい作品であるとも言える。ごく単純化して言えば、この作品に描かれているのは、漁村という封建的地方集落における私刑による異分子排除の過程である。筆致は淡々としており、私刑として漁師仲間を海に沈めるというショッキングな出来事も殊更ドラマチックには描かれていない。穆三が海に沈められるくだりを見てみよう。

彼らは何二姑を入れていた麻袋に穆三を詰め込み、石を一つ括り付けた。四人の男が麻袋を舟に担ぎ込む。舟が沖まで出ると、男達はそれと声を上げ、ドボンと麻袋を海中に投げ入れた。海に大波が湧き上がり、続いて波紋が幾重にも外に向かって広がり、消えていく。とうとう波紋がすっかり消えてしまうと、海は何事もなかったかのように元の静けさを取り戻したのだった！⁽³⁾

麻袋に詰め込まれ、石まで括り付けられて海に沈められた穆三がどうなったかは描かれず、上記のシーンに続いて「皆が去った後、硬い岩のように海岸に座り込み、呆然と海を見ている何二姑を、西に傾いた月が照らして

いた」という一文で物語は幕を閉じてしまう。穆三が海で死んでしまったことは容易に想像し得る。

この「抛錨」についての評価には次のようなものがある。

『抛錨』は親切心と義侠心に満ちた好漢穆三の形象を作り出すのにかなり成功している。穆三はタチの悪い連中がのさばる中で、虐げられ苛められている漁民の復讐のために敢えて困難を取り除かんとし、最後には無実の者を助けようと自らの命を毅然と差し出した。この穆三の形象の意義および読者を感動させる点は、生活という長い闘争の中で形成された多くの労働者の率直さや勇敢さといった貴重な品性を、穆三が体現しているところにあるだろう。⁽⁴⁾

この評は、穆三が労働者であるという点を重くとらえ過ぎており、文革終結後ほどない一九八二年に書かれたものであることを考えれば、時代的な制約の中での読みであるという感が否めない。穆三の形象に関しては、おおよそこの評の通りであるが、「親切心と義侠心に満ちた好漢」と言い切れるほどの強烈な印象は受けないからである。寧ろ淡々とした物語の中で光るのは、漁師の男達の私的制裁の衝撃性と、自らの行ないの責任を取るために従容と死に就く穆三の潔さの二点であるように思われる。楊振声は自らの小説創作に関し、「本当の話をする小説家など一人もいない。(中略) しかれば、小説家は皆ペテン師か？私は又もこう答えるだろう、人をペテンにける小説家など一人もいない、と」⁽⁵⁾と述べており、虚構ではあっても小説の真实性やリアリティを重視していることも明確にしている。この点を受ければ、楊振声の「抛錨」も登場人物の魅力よりも、ある出来事が映し出す人々の心の動きに作品の主眼を据えたのではないかと指摘し得る。

2. 変奏…石華父『海葬』——恋愛と復讐の物語

楊振声の「抛錨」を戯曲化したのが石華父である。石華父については日本での専論がないため、経歴を述べておく。本名は陳麟瑞、一九〇五年に浙江省新昌で生まれている。一九二八年に清華学校卒業後、公費でアメリカに留学、ハーヴァード大学でイギリス文学を専攻し修士号を取得。ヨーロッパを廻り、三三年に帰国、上海暨南大学の外文系主任となる。三四年以降、復旦大学・光華大学・震旦女子文理学院でも教鞭を執った。上海「孤島」期に戯曲執筆を始め、四幕喜劇『職業婦女』（一九三九）を発表。その後、『晚宴』、『孔雀屏』、『雁来紅』、『尤三姐』⁽⁶⁾などを相次いで発表・上演。一九四〇年代上海の演劇界では一定程度以上の影響力があったようだが、文化大革命初期の六九年、汚名を負って失意のまま亡くなった。⁽⁷⁾ 楊振声との交流については不明だが、楊・石ともに官費で米国に留学し、ハーヴァード大学で学んだという経歴が共通している。

石華父の「抛錨」は『文芸復興』第二卷第一期（一九四六年八月）と第二卷第二期（同年九月）に二期連載の形で発表されている。これは一九四四年九月十四日から十月二十二日にかけて、朱端鈞を監督に上海聯藝劇社創立一周年公演の演目として、蘭心大戲院において三幕劇『海葬』の名で既に上演された後の掲載であった。友人であった楊絳は『海葬』を「舞台の最後的一幕で、青く幅の広い襦子がライトを受けて揺らめき、海の波を表していた⁽⁹⁾」と回想している。以後、混乱を避けるため、石華父「抛錨」は『海葬』と記すことにする。

「抛錨」の脚本化の意図および『海葬』への改題意図については、石華父自身何も述べていないが、原作の「抛錨」からの改編箇所を確認することで、石華父の狙いを推測することは可能だろう。

『海葬』は主人公穆三が他の漁師の男達の怒りを買ひ、最終的に海に沈められるという大筋において「抛錨」と

変わらないが、大きく異なるのは、新たに素姐、何九、何大という形象が投入された点とその結果生じた新エピソードである。彼らの形象と物語との関わりを以下に見てみよう。

まずは素姐であるが、彼女は「抛錨」の少年漁師小乙の姉、穆三の幼馴染として登場する。勝ち気だが気立ての良い美少女であり、両親を早くに亡くし、貧しいながらも、弟を励ましながら健気に生活している。彼女は男気溢れる穆三に愛情を抱き、結婚するならば彼とであると決めており、穆三も素姐には心からの愛情を寄せている。更に、劉四も素姐が好きで、結婚したいと思っている様子も描かれている。

何九は病気で寝たきりの中年男性。元々は漁師であり、穆三が援助してくれるのを嬉しく思っている一方、妻何九姑と穆三との関係を疑っている。この何九の妻何九姑は、明らかに「抛錨」の何二姑が原型となっている。実際、何九姑と穆三の関係は曖昧である。何九姑は病気の夫が亡くなると、頼り甲斐のある穆三と島を脱け出したいと思っており、穆三の方も何九姑の積極的な態度にも拒絶をする訳ではない。

何大は天津の役人。島出身で、関係は明確に示されないが、おそらく何九の兄か従兄、少なくとも血縁関係があるらしいことが会話などから読み取れる。彼は若い頃、居酒屋で居合わせた穆三の父親をこづき、結果として穆三の父親を死に至らしめたという過去があり、それを今なお悔いている。

新たに加わったこの三人の人物により、『海葬』は原作「抛錨」とは異なる色彩を帯びることになる。即ち、恋愛と復讐のモチーフである。「抛錨」において、穆三と何二姑の関係は明らかにされてはいないものの、何二姑が穆三を頼っている様子や穆三の何二姑への態度から、恐らく男女関係にあるのではないかという推測が成り立つ。『海葬』では素姐が穆三への恋心を隠すこともなく、何九姑への嫉妬心を露わにしたり、何九姑を穆三に近づけまいと何九に入れ知恵をしたりするなど、穆三・素姐・何九姑の三角関係が明確に打ち出され、又劉四も素姐

を愛し、穆三に嫉妬していることを見て取れるため、穆三・素姐・劉四の三角関係も存在している。このように『海葬』では恋愛関係の要素が前面化している。

一方、「抛錨」では劉四の小乙への嫌がらせへの報復が、穆三を死へ向かわせることとなっているが、『海葬』ではその原作の主線に、穆三による父親の復讐が加わっている。過去の過ちを認め尚且つ命乞いをする何大を、穆三は許すことなく殺害してしまうのであるが、穆三が何大を殺害した直後、『海葬』では不思議なシーンが展開される。死んだ何九の幽霊が登場するのである。この何九の幽霊登場にはいかなる意味があるのだろうか？

穆三は突如登場した何九を見て、魂を奪われたかのごとく、次のように述懐する。

おめえ、何九じゃねえか。俺が何大を殺したのを責めてんのか？でも、俺を責めるのは筋違いだぜ、ヤツが先に俺の親父を殺したんだからな。「父さんの仇を忘れるんじゃないよ！」お袋が死に際にそう言ったんだ。お袋の言うことを聞かない訳にやいかねえだろ。（中略）親の仇を許せるってのか？何九、何か言えよ！何で黙ってるんだよ？何も言いたくないってのか？ああ、思い出したぜ、おめえ、もう死んだんじゃないか。幽霊だから、おめえ、口がきけねえんだ、そうだろ？脅かすんじゃないよ、俺は怖くねえぞ。おめえの九姑を俺が横取りするなんて思うなよ、誰が九姑と天津なんかに行くかってんだ。ありや、九姑を騙すための話だ。俺は九姑を好きだったことなんかねえ。俺は心から本気で素姐を愛してるんだ。（中略）俺の心には他のヤツなんかいねえ…、素姐だけなんだ…素姐…（第三幕第二場）⁽¹⁰⁾

何九の幽霊が登場するのは、実はここだけではない。第二幕第一場においても、漁師達によって何九の幽霊の目撃情報が交わされる。漁師達は、何九姑が穆三と一緒にいるために夫を殺したと疑っており、姦婦問男には制裁を下すべきだと息巻き始め、穆三が劉四の網を盗んで売り飛ばしたことへの仕返しもある、穆三殺害計画は

実行へと移されていく。何九の幽霊は、穆三がこれまで何九夫妻に親切にしてきたのは、何大への復讐が目的にあったことや、素姐への真率なる愛情を吐露する相手としての役目を担っているだけでなく、物語の構造上、漁師達の穆三への私刑を正当化する機能をも果たしている。

しかしながら、穆三を死へ決定的に導いたのは素姐であった。素姐は穆三と何九姑との関係に嫉妬し、劉四に彼の網を盗んで売ったのは穆三であること、穆三を殺すなら急がないと、明日には穆三が何九姑を連れて天津へ行ってしまうかねないことなどを告げるのである。穆三を殺すと言う劉四に「もしあんた達にその度胸があるなら、今晚やりに行くべきよ」などと唆しもある。尤も、それは嫉妬の余り、穆三一人を死に追いやるためだけにしたことではなかった。素姐は穆三が海に沈められる直前、手持ちの中で最も美しい服を着て現れ、穆三に「あんたが私をお嫁さんにしてくれるのを待ってた」「生きていて一緒になれないなら、死んでやっと一緒にされるのよ!」と自分も一緒に死ぬ意志を見せる。「後悔しないか?」と問う穆三に、素姐は「何で後悔なんか。愛するなら徹底的に愛し、恨むなら徹底的に恨むのよ。これもあんた自身が言ったことよ。行きましよう!」と促すのである。最後のシーンを見てもよい。

九姑…〔穆三を引き留め〕駄目よ、こんな妖婦にあんたを殺させたりするもんですか。この子が死ぬ気なら、この子一人で死なせたら良いのよ。何であんたを連れて行かなくちゃいけないの。

素姐…何をぐずぐずしてんのよ。恥をかかせないで!彼のことを本当に愛しているなら、あんたも私と一緒に海に跳び込めば良いでしょう。ほら!行かないの?

劉四…素姐、身投げなんかするな。

素姐…するなって?あんたが私を想ってくれるんなら、明日、海の底まで私を掬い上げに来て。〔漁師達に向

かつて」あんだ達、麻袋と石、全部用意できた？

王五…用意できたぜ。

素姐…それじゃあ、行きましょう！

〔漁師達、次々と退場。舞台上には素姐・穆三・劉四・九姑の四人だけが残る。素姐、穆三を見つめ、穆三は思わず知らず素姐に惹き付けられ、ゆつくりと彼女の後について行く。劉四と九姑は驚き、腑抜けたようになっている。素姐、ゆつくりと退場。頭をめぐらせると、観客は彼女の顔に極度につらそうな勝利の笑みを認める。穆三、素姐を見つめながら続いて退場。幕〕

以上の引用からも、穆三を麻袋に詰め海に沈めるのを直接的に行なうのは、劉四ら他の漁師達であるが、そこまでの道筋を具体的につけたのが素姐であることが見て取れるだろう。素姐は愛した穆三と一緒にするために、自分の死をも厭わず、海へと向かうのである。「極度につらそうな勝利の笑み」は、死に際してやっと愛する男を占有できた喜びを意味しているのではないだろうか。自らの愛情を全身に溢れさせ、穆三との死を選ぶ素姐には、個我的強さと主体性を見て取れる。彼女に惹き付けられ、黙々と後を付いて行くだけの穆三とは対照的である。『海葬』はラストにおいて穆三ではなく、素姐の物語になったと言えるだろう。

『海葬』は「抛錨」の淡々とした雰囲気と漁村の私刑を描いた作品から一転、復讐譚を内に孕んだ、より人間臭いメロドラマ、悲恋物語へと姿を変えた。石華父は「抛錨」を舞台化する際に、わかりやすいドラマチックな効果を狙って、観客を惹き付ける恋愛と復讐のモチーフを付加したのではないだろうか。

3. 変奏…柯霊『海誓』——仇敵の命を救い、復讐は繰り返される

「抛錨」が舞台化され『海葬』となり、それに触発されて柯霊は映画『海誓』のシナリオを書いた。柯霊についても経歴を簡単に述べておこう。本名は高季琳、一九〇九年広州生まれ。最終学歴こそ小学校卒業であるが、若い頃に古典小説や新聞・雑誌を読むなどして文学の基礎を身につけ、十五歳から執筆を開始。一九二〇年代から雑誌の編集に携わり、『文芸報』副刊や『浅草』、『万象』、『周报』、香港『文匯報』などの主編を務める。映画の脚本執筆は一九三八年の『武則后』に始まり、一九四九年以降は主に脚本執筆に従事し、『乱世風光』（一九四〇）、『夜店』（一九四五、師陀との共著）、『腐蝕』（一九四九）、『秋瑾伝』（一九七九）などがある。楊振声との関係は不明だが、石華父とは親しかったようで、「石華父同志は私の良く知っている友人だ」⁽¹²⁾、「麟瑞同志は学者であり、作家であり、品性高潔、人となりは穏やかで慎重深い」⁽¹³⁾と記しており、また石華父の遺作を戯曲集としてまとめる際に、共通の友人である楊絳に序を書くように頼んだのも柯霊であった⁽¹⁴⁾。

柯霊は一九四八年の冬、香港で『海誓』を執筆した⁽¹⁵⁾。翌年、程歩高を監督として永華影業公司により映画化されている⁽¹⁶⁾。実際の映画化に当たり、穆三は「黄大」、素姐は「秋姐」などと名前の変更が見られるが、柯霊のシナリオは「抛錨」「海葬」を踏襲した形で書かれている。柯霊は『海誓』が「抛錨」「海葬」を換骨奪胎したものであることを述べた上で、「しかしながら、映画のシナリオは小説・舞台劇の基盤とは既に離れてしまっており、ほとんど勝手な虚構に近く、映画のシナリオ中に存在する問題は、完全に私が責任を負うべきであって、楊・石のお二方とは無関係である」と記している⁽¹⁷⁾。物語の大きな基本線である、私的制裁による穆三の死については「抛錨」と同様であり、穆三と素姐を中心とした複雑な恋愛模様および殺された父親の仇を討つ復讐譚が加わって

る点では『海葬』を受けている。又、ほとんどの登場人物も『海葬』を踏まえていると言って良い。異なるのは、劉老板と穆大媽という人物が新たに加わっていることである。

劉老板は劉四の父親であり、島一番の船主として多くの漁師達を支配下におく存在であるが、若い頃に穆三の父親を死に至らしめた過去がある。『海葬』における何大が原型であろう。

穆大媽は穆三の母親である。病気で倒れ、臨終の際に、二十年前に夫が自殺したのは劉老板に追い込まれたことだったと穆三に告げ、父親の恨みを忘れるな、仇を討って遺恨を晴らせと言ひ遺して死ぬ。

この二人が新たに加わったことで、『海誓』は一気に復讐譚の色が一層濃くなっていく。「抛錨」「海葬」で見られた、穆三が劉四の漁網を盗み、売り飛ばす云々のエピソードが姿を消し、穆三の復讐が物語の前景に出て来ているのである。例えば穆大媽の死は穆三にとって、今までは知らされてこなかった父親の自殺の真相を明らかにし、復讐心が燃え上がる契機となっているし、穆三が他の漁師と諍いばかり起こしているにも関わらず、劉老板がそれを黙認しているのは、彼が穆三の父親を死に追いやってしまったことへの一種の贖罪であることが描かれ、それによって穆三の報復への道筋がはっきりと示されているのである。ところが、意外な展開が穆三と劉老板を襲う。穆三・劉老板・小乙を含む漁師達を乗せた漁船がある晩、嵐に遭う。穆三は暴風雨を機に劉老板の命を狙うのだが、漁船は大波によって座礁。穆三は、海に投げ出され溺れかけた劉老板を結果的に救ってしまう。その嵐によって生き残った漁師は、穆三と劉老板だけであった。劉老板の生還を祝う宴会の晩、劉老板は命の恩人たる穆三を自ら迎えに赴く。穆三は劉老板に自分の復讐心を示し、家の裏の断崖に劉老板を追い詰め、とうとう刺殺の後に海に突き落としてしまう。父親を殺されたことを知った劉四が仲間を率いて穆三を捕え、最終的に彼を麻袋に詰め、海に投げ込むというくだりは「抛錨」「海葬」同様である。

さて、『海誓』に挿入された、図らずも仇の命を救ってしまうというこのエピソードは、実は柯霊の独創ではない。楊振声の短編小説「報復」に見られるものである。「報復」は一九三四年一月、『大公報・文芸副刊』第三十二期に掲載された。高二と小翠は、高いお金を払って小翠と結婚しようとした劉五から、高二が婚礼前に奪うという一種の強奪婚によって結ばれた夫婦である。ある日、小翠が山中で劉五から暴行を受け、高二は怒りの余り、日々凶暴な振る舞いをするようになる。漁に出た高二は嵐の晩、溺れかけた劉五を彼とは気付かずに救う。劉五は高二に恩義を感じ、酔い潰れた高二の財布が盗まれそうになるのを秘かに防ぐ。後にそれを知った高二は劉五に礼を言い、二人は和解するという物語である。⁽¹⁸⁾ 漁に出た晩に嵐に遇い、溺れかけた仇を救ってしまうことになるというエピソードが、まさに『海誓』に共通する。柯霊は次のように述べている。

小説（楊振声の「抛錨」を指す…引用者）の狙いは、おそらく漁民の荒々しく猛々しい様と、古い漁村の野蛮な遺風を描くことのみにあったのだろう。この舞台劇は上海において『海葬』の名で上演され、観客に好評をもって迎えられた。（中略）私はこの作品を改編して映画の脚本を書く約束を永華公司とした時、作品の大枠のみを使わせてもらい、全く別のエピソードを入れることにした。⁽¹⁹⁾

柯霊は楊振声の「報復」については言及せず、「全く別のエピソードを入れる」としか述べていないが、「報復」に材を取ったことは明らかではないだろうか。⁽²⁰⁾ 上の一段に続いて、柯霊は更に自身の『海誓』が『海葬』とはほとんど異なってしまったために、映画会社である永華公司が原作の名を挙げない提案をするほどであったと述べている。確かに復讐譚が前景化された『海誓』は、「抛錨」とは大分雰囲気異にするが、では「抛錨」「海葬」とは別物かと問われれば、根本の類似を指摘されるのは免れまい。

ただ、漁民の私刑が主要テーマであった「抛錨」は『海誓』として映画化される段において、「報復」のモ

ティーフが挿し込まれたことによって、『海葬』の復讐を含んだ悲恋物語から、「期せずして仇敵の命を救ってしまうが、結局は仇敵の命を奪う」という激しい階級闘争の様相を呈すことになった。これは柯霊の『海誓』執筆時期および映画上映時期が、抗戦勝利直後・建国直前であったことを踏まえた上で換言すれば、柯霊は労働者たる漁民の階級的復讐を描くために「抛錨」を素地としたということではないだろうか。そう考えると、「抛錨」のプリミティブな物語は、『海誓』となったことで俄然政治的メッセージを放ち始める。

さて、穆三が劉四達から逃れ何九姑の家に隠れた結果、彼女が自分の代わりに連れて行かれそうになるのを見て姿を現し、劉四達に捕まり海に沈められるという作品最終部の基本線は、前述の通り「抛錨」「海葬」との共通項であるが、『海誓』ではどのように描かれているのであろうか。

一艘の小型漁船が夜の海に停泊している。穆三は舳先に昂然と直立している。彼の両手は後ろ手に荒縄で縛られている。カメラが下方に向けられ、上半身から下半身まで麻縄で縛り上げられているのが映る。カメラは穆三の足が大きな麻袋の中に入れられ、更に麻袋の中には大きな石も入っているのを映す。麻袋の脇では小さな蠟燭が二本、火が灯されている。続いて四本の手が伸び、麻袋の口を縛り始める。／（中略）／麻袋の口が縛られ、穆三は完全に袋の中に押し込められる。／劉四、「投げ入れろ」という表情をする。／二人の雑役が麻袋を持ち上げ、力いっぱい海に放る。／ドボンと音がし、麻袋は波間に呑まれていく。

同時刻、画面は素姐の家に替わる。／カメラに映る素姐は、花を髪に挿し、身なりを整えている。麻袋が海に落ちるドボンという音がし、余韻が届いたかのよう。心の内に何かを受け止めたように、素姐はゆつくりと立ち上がる。／素姐は無表情、一步一步ドアの外へ歩いて行く。

風が強く、波の荒い海上。素姐は一艘の小舟に乗り、波に逆らうかのように進んでいく。／ザバーン、大波

が押し寄せる。／誰もいない小舟が波間に浮き沈みしている。小舟を見下ろすカメラ、ゆつくりと遠のいていく。／フェードアウト。⁽²¹⁾

穆三の死は、父劉老板を彼に殺された劉四による復讐でもあり、最早“抛錨”は異分子排除の機能を果たしてはいない。更に『海葬』との大きな違いは、素姐の最期の描き方だろう。2. で見たように、『海葬』では素姐が穆三の死を決定づけ、彼とともに死ぬために積極的に海に向かっていく。しかし『海誓』では、素姐は穆三が海に沈められると一人で小舟を海に出し、穆三の後を追って身投げをするのである。素姐は嵐で弟小乙を喪い、悲嘆の余り精神の均衡をも欠いているらしい描写もある。従って『海誓』の素姐の死は、『海葬』における愛する男と死地に赴く主体的な死とは異なり、弟と穆三という大切な二人を喪った結果としての悲しい選択でしかない。

結び——素姐に託されたもの

以上、楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯靈『海誓』の三作の分析を通し、新たに加えられた要素を比較検討してきた。そこから見えてきたのは、漁師の私刑を淡々と描いた小説「抛錨」が舞台『海葬』・映画『海誓』へと改編されていく過程で新たに付与されたものの意味である。

簡単に振り返っておこう。『海葬』は何大という人物を投入することで物語を復讐譚にし、素姐という女性を投入することで愛情面での複雑な関係を加えた。漁師達の“抛錨”という私刑に、様々な人物の感情が錯綜し絡み合う入り組んだ背景を提供したのである。その結果、作品はしかし却ってわかりやすいメロドラマとなり、舞台化の際には観客にアピールしやすい物語となった。小説の視覚化の際に、男女間の複雑な三角関係や嫉妬・激情溢れるやりとりは、具体的な「画」として機能したのであろう。そして、メロドラマ的色彩が濃くなった結果、

素姐の意志ある死が穆三の死の衝撃性を押さえ、『海葬』は素姐の勝利の笑みでもって幕を閉じたのである。

『海誓』では劉老板・穆大媽という二人が新たに投入され、映画は復讐譚としてより強いアピール性を有した。更に「報復」のエピソードを取り入れ、穆三が嵐の晩に父の仇である劉老板の命を救ってしまうという挿話によって、映画のスクリーンには嵐という視覚的にも聴覚的にも激しいシーンが提供され、連れ合う人間心理の表象となった。ラストの穆三の「抛錨」は異分子排除の機能を失い、劉四による父親の復讐を意味することとなり、結果として階級的な復讐の連鎖の物語へと姿を変えたのであった。柯霊は『海誓』について「私は劇中、次の一点を強調した。血の債務は血をもって償わねばならず、階級の仇は圧迫者の懐柔や甘い汁などでは決して消し去ることはできない」と述べ、復讐のモチーフの重要性を主張している。『海誓』では階級的復讐が主たるテーマとなり、私刑のラストシーンは復讐のあくまで付随的なファクターでしかない。素姐の物語となった『海葬』は、『海誓』で再び男たちの物語、しかも労働者の物語となったのである。

ここで筆者が注目したのは素姐の形象である。「抛錨」には登場せず、石華父によって新たに作られた素姐は、柯霊の『海誓』にも登場する。楊振声のどこか乾いて平淡な「抛錨」に、素姐が加わったことの意味は決して小さくない。穆三が「抛錨」「海葬」「海誓」三作品全てにおいて「粗野ではあるが男気溢れる勇敢な漁師」としての役割を担わされているように、素姐は石華父と柯霊に「愛する男とともに死ぬ女」として、作品を悲劇に彩る役目を負わされた。しかしながら、作品の最後を彼女の死が締め括るという点では共通しているものの、生きている一緒になれば死をも厭わないとばかりに積極的に死へ向かう『海葬』の情熱的な素姐と、弟と穆三が死んだとなつては自分も生きていく意味はないと悲嘆に暮れ、一人海へ漕ぎ出す『海誓』の素姐ではまるで別人である。この素姐の造型や形象の相違に着目すると、「抛錨」から『海葬』『海誓』への変奏の過程は、楊振声・石

華父・柯靈の三者の文学観の相違を如実に示しているのみならず、とりもなおさず中国現代文学が当時担いつつあった社会的使命の変遷をも意味しているように思えるのである。

この二人の素姐については、「男を追って入水する女」という視点から見ると、中国文学の歴史の中に幾つもの原型や類型を見出すことができ、その系譜を辿ることで新たな文学的形象の視座を得られるのではないかと推測される。稿を改めて論じたい。

注

- (1) 宮尾正樹「楊振声と『玉君』」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第七号、一九八八年)
- (2) 魯迅「『中国新文学大系』小説二集序」(『魯迅全集』第六卷、人民文学出版社、一九九六年。初出は一九三五年)
- (3) 楊振声「抛錨」(孫昌熙・張華編選『楊振声選集』、人民文学出版社、一九八七年)。以後、「抛錨」からの引用は全て本書に基づき、拙訳に拠る。また、タイトルとなっている「抛錨」は幾つかの中日辞典では「錨を下ろす」を原義とし、「物事が突然ストップする」という派生義があるが、本作においては「海に沈める、海に沈めて始末する」という意味で使用していると思われる。
- (4) 孫昌熙・張華「論楊振声の小説創作」(『文史哲』一九八二年第五期)
- (5) 楊振声「『玉君』自序」(注3前掲書)
- (6) 邵迎建著『上海抗戰時期的話劇』(北京大学出版社、二〇一二年)によると、『職業婦女』は一九一九四年十一月、『晩宴』は一九四二年十二月、『尤三姐』は一九四五年五月の上演。これらの戯曲の正確な執筆時期は不明。
- (7) 石華父の経歴については、柳無非「回憶麟瑞」(上海社会科学院文学研究所編『上海「孤島」文学回憶録』上巻、中国社会科学出版社、一九八四年)、楊絳「懷念石華父」(『楊絳作品集』第二卷、中国社会科学出版社、一九九三年)を参考にした。

(8) 注6邵迎建前掲書。

(9) 注7楊絳前掲文。

(10) 石華父「抛錨」(『文芸復興』第二卷第二期、一九四六年九月)。以後、石華父「抛錨」からの引用は全て本書に基づき、拙訳に拠る。亀甲括弧内はト書き。

(11) 柯靈の経歴については、唐文一「柯靈小伝」(唐文一編『柯靈書信集』、学苑出版社、一九九六年)および賈植芳他編『中国現代文学詞典』(上海辞書出版社、一九九〇年)の「柯靈」の項を参考にした。

(12) 柯靈「我的人生旅行」——『柯靈電影劇本選集』序言(『柯靈電影劇本選集』中国電影出版社、一九八〇年)

(13) 「致唐樟榮」一九九二年二月二十五日(『柯靈文集』第六卷、文匯出版社、二〇〇一年)

(14) 「致柳無非」一九八四年四月十六日(注13前掲書)

(15) 注12柯靈前掲文。

(16) 『海誓』の初回上映は香港、一九四九年十一月二十二日。英語題A Fisherman's Honour、国語使用、モノクロ作品。黄大(穆三)を陶金が、秋姐(素姐)を李麗華が、梁九嫂(何九姑)を劉琦が演じるなど、当時のスター俳優がキャスティングされている。筆者未見。

(17) 注12柯靈前掲文。

(18) 注3前掲書に基づく。

(19) 柯靈「関于『海誓』」(『柯靈文集』第三卷、文匯出版社、二〇〇一年)

(20) 注7柳無非前掲文では、石華父の妻柳無非は誤って『海葬』は楊振声「報復」の改編であると記している。

(21) 柯靈『海誓』(注12前掲書)

(22) 注19柯靈前掲文。

附記：本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究(C)「近代都市・青島における知識人の交流と文化空間の創成」(課題番号：24520387、研究代表者：富山大学・齊藤大紀)による研究成果の一部である。